

# 思いは今 風に乗って

阿蘇外輪のすそ野に広がる「吉無田高原」。  
360度の大自然が織りなす景観美は九州でも指折りといわれる。  
吉無田水源をはじめ、「緑の村」草スキー場やキャンプ場には  
年間多くの行楽客が、都会には無い癒やしを求めて訪れている。  
そんな憩いのひとときを与える「吉無田高原」に今  
新たな時代の風が吹きはじめています。  
今月号では、「吉無田高原」の壮大な大地に思いをほせ  
その魅力と価値、そして可能性を考えてみたい。

## Top News



- ㊤／伝統芸能フェスティバルで光永平蔵役を熱演  
(平成20年11月24日)
- ㊦／九州横断自動車道延岡線の鶴山谷トンネル貫通式  
(平成23年2月25日)
- ㊧／消防団通常点検で団員の規律を点検者で確認  
(平成23年4月3日)

## 町長の補佐に徹した4年間 危機管理を唱えた安全安心

木村元二副町長が退任



「4年間、一日一日の時間があつという間で、とにかく充実していました」  
自らの役目をやり遂げ表情を緩めて振り返るのは、元副町長の木村元二さん。  
9月20日付けで、副町長の任期が満了し、退任となりました。木村さんは昭和42年、少年自衛隊に入校。国民を守る職務と使命感に燃え、厳しい訓練を積み重ねて、西部方面の総監部総監付副官や航空隊本部幕僚などを歴任後、平成18年2月に退官しました。自衛隊での経験と知識、危機管理能力を求められて、平成19年9月、御船町副町長に就任しました。副町長に就任後は、町長の補佐役に徹して、マニフェスト(約束)の推進、職員教育、危機管理の体制などに尽力。特に危機管理の面で力を発揮して、県総合防災訓練、町防災計画などには先頭に立って、町民の安全安心に全神経を注ぎ込みました。  
「危機管理は、災害への情報収集に努めて、出動態勢を整えておくこと。被害予測も含め、常に防災意識を働かせて、どこにいても危機意識をたえず持ち

合わせておくことが大切です」  
一方で、御船の文化や歴史を誰よりも愛し、地域に足を運んで交流を図る熱心で温厚な人柄でも親しまれていました。  
「御船には、自然や水などのめぐまれた風土があります。そして宮部鼎蔵先生といった先哲、石橋や井出など誇れる史跡がありますので、観光面に結びつけていく必要もあると思います。私は4年間で培った知識を、何かの形で、御船町のために貢献できればと考えています」  
郷土を思う気持ちは色あせることなく、その輝きは増し続ける木村さん。今、新たなスタートラインに立ち、町の頼もしい応援者として、これからも全力で走り続けていきます。

### ●Profile

きむら・もとかず。昭和26年生まれ。昭和42年3月、少年自衛隊入校。平成8年7月、PKO UNDOF隊勤務。平成9年7月、西部方面総監部総監付副官。平成14年3月、西部方面航空隊本部幕僚。平成18年2月、自衛隊退官。平成19年9月、御船町副町長就任。マニフェストの推進、危機管理の体制など多方面で尽力。平成23年9月、副町長退任。陣地区在住。60歳